津軽こぎん刺し

今からおおよそ200年前、藩政時代の贅沢禁止令により着物まで制約された農民は、綿入れの着物も着ることができませんでした。このため、自然の山野に自生するカラムシを藍で染めた麻布に、保温と補強のために麻の白糸で色々な模様を刺して着ていたそうです。「こぎん」は、まさに北国の厳しい風土から生まれた生活の知恵と技と言えるのです。

白い麻布で浮き出す美しい幾何学模様は、一、三、五、七、九と布目を奇数で拾って刺すという独特な刺し方によるものです。また、津軽の言葉で表現された「田のくろ」、「そばカドコ」、「ベコざし」、「ねごのマナグ」、「カチャラシ」、「豆コ」、「花コ」といった模様は、農村の生活の中に活きづいているものから生み出されたもので、その模様を見るとなるほどと思える名前が付けられています。

「こぎん」は、これらの模様をさまざまに組み合わせて刺していきますが、地域によって模様の配置の仕方に違いがあり、岩木川の流れを境にし、西の方で刺されたものを「西こぎん」、東の方で刺されたものを「東こぎん」、川下の方で刺されたものを「三縞こぎん」と呼ばれています。

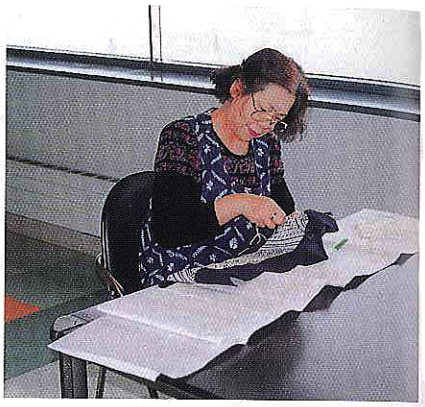
これら「こぎん模様」は、津軽弁の余韻を残して母から娘へ、娘から孫へと伝えられ、津軽の人々の心の中に語り伝えられてきました。

そして、娘たちは、いつの日か夫となる人のために何枚かの「こぎん」をその美しさを競って刺すようになったそうです。

このように受け継がれて来た「こぎん」も綿布が簡単に手に入るようになった明治25年ころからは、ほとんど刺す人もなくなり、急速に衰えていったのです。

でも「こぎん」は今、その素朴な美しさに魅せられた人達によって再び見直され、先人たちが残した優れた技術と地域に活きづくものを愛する心は現代に受け継がれています。

今回のぱ・る・るプラザの作品は、故前田セツが幾何学模様の美しさを山脈模様で表現したデザインを用い、「八甲田山」をイメージするものとして、前田セツこぎん研究会員10名で作成したものです。



前田セツこぎん研究会代表
前田　章子氏